



1982年(昭和57年)
8月号(No. 446)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価一部 150円

目次

- 二回目のムスタン 高橋 照……………(1)
第二回 日本登山医学研究会……………(1)
会員懇談会(会員来室日)
—総務財務委員会一年間の歩み— ……(2)
「スライド映写と懇親会」
—チャールズ・ハウストン博士を迎えて— ……(2)
図書紹介……………(4)
グルカ兵と英国人登山家の歓迎会……………(5)
ヨーロッパにおける
秩父宮雅仁親王殿下写真集……………(6)
東西南北……………(6)
報告……………(7)
集委会員会、自然保護委員会、
北海道支部
お知らせ……………(1)(6)(7)(8)(11)
海外委員会、フィルム委員会、
婦人懇談会、図書委員会
自然保護委員会・静岡支部
集委会員会、青愁・指導委員会
会務報告・ルーム日誌・会員移動
……………(9),(11)
山岳洋書購入のお知らせ 図書委員会
……………(10)

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時

日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

お知らせ

ネパールの秘境

ムスタンの人と山

ブリクティ登山の

報告とスライド映写

昭和五十七年九月二日(木)

十八時三十分より

場所 JAC ルーム

講師 菊地 薫氏

海外委員会

二回目のムスタン

高橋 照

〔高橋照会員より土曜会宛にきた手紙を土曜会の皆さんの好意で掲載させて頂きました。〕

四月十二日佐々会長と一緒にカトマンドゥに参りましたが、まだ薬の厄介にはなっておりません。毎日ククリ・ラムを半分空けており極めて元気です。四月二十二日より約二カ月間ムスタンの旅に出掛け三・四日前にカトマンドゥに帰ってきました。

今回は第二回目のムスタン入りで、外国人で二度入城した者は世界で私一人ということになりました。今度はカリガンダキ左岸(北に向かって右側)地方の無人地帯で、はじめて外国人が来たそうです。全くの地図上の空白地帯で、幾つかの誤びゆうを発見しまし

た。地図の中には Survey of India の 1 inch 1 mile が比較的实际に近いようです。他の地図は全く出鱈目です。

毎日々が四〇〇〇～五〇〇〇の山岳地帯の尾根道、山腹道で時々河(コウラ)を渡る時に二〇〇〇も上下しなければならぬきびしい道(道など余りありません)でした。全くの無人地帯なので、二日・三日目に会おう西藏遊牧民のヤクの毛で作った天幕を発見し、道を聞くだけです。余り難しい複雑な route は西藏人に案内させました。

言葉は全く西藏語しか通じません。音やイントネーションから推して西藏の言葉のようですが、ラサ方言は完全に通じます。ロー

第二回

日本登山医学研究会

第二回日本登山医学研究会(北博正会長)は五月二十八、九の両日にわたって京大会館で、チャールズ・ハウストン博士夫妻を招いて行なわれた。登山の尖鋭化とヒマラヤ登山の普及するなかで、やはり科学的な手段の援用は最近必要度を増しており、高所医学に関心を寄せる多数の参加者を見た。

第一日のしんがりとして、ハウストン博士による「高山病と高所生理学」の講演(座長 伊藤洋平氏)「京大微生物」が約一時間にわたって行なわれた。肺水腫の解明についても同博士は手がかりを披露されたが、今後の成果が期待される。また全般に、信大グループによる肺水腫についての研究が注目をひいた。二日間にわたった研究と主な演者を順次記しておく。

〔基礎〕(大森薫雄座長)神奈川県立厚木病院

①メーデル峰における Clostridia の分布(山元暁)岐阜県希望が丘

山をきれいに「ミ」は持ち帰る

学園)②高所と奇型—低圧によるマウスの発生異常(本山十三生)信大順応医研)③慢性低酸素負荷による横隔膜の形態変化(玉置淳)東京女子医大)〔低酸素症、トレーニング〕(森本武利座長)京都府医大)④慢性呼吸不全(低酸素)症例における睡眠時の呼吸異常(大井元晴)京大胸部研)⑤高地(富士五合目)における低酸素及び高炭酸ガス換気応答の陸上トレーニングの効果(吉田明夫)千葉大第二生理)⑥五歳児の心拍数から見た登山の運動強度(山本悟)筑波大研究生)〔高所肺水腫、そのI〕(中島道郎座長)京都市立病院)⑦ヘマトクリットの増加が肺循環におよぼす影響(酒井秋男)信大順応生理)⑧高地肺水腫の尿中PGF_{2α}の推移(小林俊夫)信大第一内科)⑨三〇〇〇前後の登山で高地性肺水腫を疑われた二症例(町田和子)国療東京病院)〔高所肺水腫、そのII〕(古原和美座長)信大順

方言とも多少違うようです。

今回は一〇〇〇人くらい収容出来るカムバ・ケーム(Kampa Camp)を通り大変興味がありました。

西蔵との国境近くには中国軍の敵襲に備えた監視村やトーチカらしきものがありました。彼等はよくぞこんな処に家を建て、そして住み、色々な間道(極めて危険な道だが)を作ったものだ、唯ただ感心するばかりです。

地形は極めてダイナミックで、そのスケールの大きさ、荒れはたてた地表は生物の全々住めない処と言えらるくらいです。

ただ植物としてはトゲのあるCaraganaやSophora、それに少しばかりのEphedraの灌木がある

会員懇談会(会員来室日)

——総務財務委員会一年間の歩み——

総務財務委員会が、委員会本来の形をとって動き始めたのは、昨年五月の五十五年総会以降である。

新しく就任された佐々保雄会長は、「支部の充実と発展」「会員へのヴォランティア」を目標とすることを表明されました。それを達成するため「山岳会ルームの管理」「支部間交流」「会員サービス」等の山積みされた問題を解決するには、総務関係の委員を増やし、活動させることによって、その活

り、それが唯一の燃料です。不思議なことに土鳩と雷鳥が沢山いました。

今回の route はロー・マントン(M Stanton)の本街道と全く違い西蔵への裏間道のためか、タンゲやデーの村のゴムバには經典らしきものは全くなく、チョルテンも比較的新しく一世経くらい前のものようでした。矢張り古文書をたずねるには私が一九七七年に通った本街道でないといふようです。

カトマンドゥでしばらく休養をとり、また新しい次の旅に向かうと思っています。皆様お身体をお大切に。

(六月十八日 カトマンドゥにて)

深化を図ることが最良であるとの結論で、ここに適材適所の人材を選び出し、新生総務財務委員会としてスタートさせたのです。

第一回の仕事は、全国三六〇〇名会員のさまざまな形のニーズに対し、役員、各委員会は如何に対処せねばならぬかと云う主旨で開かれた、昨年七月の「第一回委員会会議」であった。この件については会報四三六、四三七に報告されていますが、一〇〇名近い役員委員の出席で、「委員のための



懇親会でのハウストン博士夫妻

カナダのマウント・ローガンで行なわれた高山病研究の様子のスライドを、海外委員長の佐藤テル会員の通訳により説明された。

一九三六年のナンダ・デヴィ遠征時のティールマン、オデール、カーター、ロイドといった人々に混じって何人かシェルバが写っていたが、この中の誰かはきっと日本隊がナンダゴットに登った時加わっていたに違いないと話された。

一九三八年にK2へ行った時のと、一九五三年にK2へ行った時のスライドがあったが、後者の中には最終キャンプのC8で猛吹雪に会った時の様子、この遠征を不首尾に終らせる原因ともなった、肺水腫になった隊員を写したものがあつた。この隊員は下山の途中不幸にも亡くなったと話されたが、これがハウストン博士を高山病研究に打ち込ませる原因になったのではないかと思わせた。

一九五〇年、同博士の父のO・ハウストンがネパール政府からエベレストの許可をもらい、博士とティールマンがカルパタールまで登り、そこからウエスト・クウム經由のルートを偵察したという、カルパタール近辺からのエベレストのスライドがあった。

マウント・ローガンの研究所のスライドでは、ここで使用する飛行機の写真、七月に一晚で四層も雪を積らせる嵐の写真、零下四〇度にもなったこの時の気温の話などがあつた。

高山病についてのスライドでは、専門的な資料が示されたが、健康な肺と肺水腫になった肺の写

「スライド映写と懇談会」

——チャールズ・

ハウストン博士夫妻を迎えて——

応医研) ⑩チベット旅行中に発症した高所肺水腫の一例(斎藤淳生 新潟端病院) ⑪高地肺水腫の脳CT所見(福島雅夫 信大第一内科) ⑫高地肺水腫の胸部X線所見(吉村一彦 信大第一内科) ⑬高所障害、高所生理(小林俊夫 信大第一内科) ⑭高所における視力障害(田中壮佑 佐久総合病院) ⑮ボゴダ峰登山における生理学的変化(能勢博 京都府医大第一生理) ⑯女性の高所登山時の生理機能について(堀井昌子 神奈川県立成人病センター) ⑰高所順応における低圧実験

室の経験(高橋純一 京大第一内科) ⑱明大エベレスト登山隊における医療報告(林田康明 国立東京第二病院) 「一般登山者のために」(薬師義美 大谷高校) ①山行に携帯すべき衛生(北博正 日本大) ②Cotopaxi 山 Matterhorn の登頂体験から ③京大カンペンチン隊医療報告(松林公蔵 京都学士山岳会) なおハウストン博士夫妻はこの後、東京で行なわれた「スライド映写と懇談会」に出席したあと北京へ。(敬称略)

の委員会」「一部会員だけの山岳会ルームの利用」などを回避し、一般会員に対しては「権利と義務」を自覚してもらい、クラブライフをエンジョイ出来るような訪ねやすいルームをつくる話し合いが一日がかりでもたれたのです。

山岳会の活性化を図り、行動力ある組織をつくるためには、若い力の台頭が必要とされます。そこで総務委員会が中心となって、新しい会員が山岳会に馴染めるような山岳会の組織に参画出来るようなムードづくりを目的に、すべての会員が自由に集まり語り合える「会員来室日」をつくりました。これは原則として毎月十五日の夜に「会員懇談会」の名称で、昨年十一月よりスタートさせました。

同時に、経験ある若い人達が一人でも多く参加出来るような、彼らの持てる登高への意欲を充たすような、四季にわたるハードな登山を計画し、それがやがて海外登山へと進展してゆく下地となる。青年懇談会、婦人懇談会、集会和指導の各委員会などを中心に登山を計画してもらい、他の委員会にも協力をお願いして来ました。

三ツ峠や秩父の小川山などにおける岩登りのトレーニング。そして昨秋の韓国仁寿峰登山。今年に入って、正月の爺ヶ岳合宿、三月の後立山五竜岳、そして五月の鯛岳八ツ峰登山、穂高合宿。これらの登山を通じて、徐々にではある

が若い力の結集をみております。一方支部においても独自の登山活動が行なわれており、昨年より五カ年計画で行なわれている中国ボゴ达峰周辺登山に、来年からは、東海支部、関西支部が登山隊を出すことも決まっております。それらの動きのなかから、やがて各支部が合同で、鯛や穂高で数日間の合宿を行なう計画も、必ずや近いうちに具体化してくるものと思えます。

梓をとりはらい、参加者すべてが一会員と云う「権利と義務」をもって自由に歓談してもらい、クラブライフを楽しもうと云う「会員懇談会」。その記念すべき第一回は、五十六年十一月十五日夜、冬期アコンカグア南壁単独登山の長谷川恒男会員を迎え、山岳会ルームで開かれた。第二回は、K2を西稜より登攀した早大隊の大谷映芳会員と、折から来日中の登頂者でパキスタン山岳会のナジール氏を迎えて、十二月十五日夜に行なわれた。いずれの懇談会も、ルームに入りきれないほどの大盛況であった。

第三回は場所を八方尾根に移し集委員会主催のスキー懇親会を地元信濃支部や関西支部などからの参加者を集めて行なわれた。第四回は今度は青年懇談会主催で、丹沢の寄小屋。熱い猪なべと脂のつた鹿肉の刺身、そしてアルコール。夜の更けるのも忘れた「二

真などを見せながら、今以上に高山病を予防する薬も治療する薬もないことを話され、どこでも、日本の山でも高山病は起こりうるのだから、登る時はゆっくりと体を慣らしながら登り、高山病にかかったと思われたらすぐ下りる。下山すればすぐ治るのだから次の日また登るといった、賢明な行動をとるようにと話されていた。

スライドが終った後は、出席者一同部屋の奥に用意されたテーブルを囲み、ハウストン博士夫妻との歓談の時を持った。二十年前来日された時のハウストン夫人について、吉沢一郎さんが感想を漏らされたが、当時交歓会に出席された会員で今なお元気

月の会員懇談会」であった。三、四、五月は「クラブライフとは何か」をさぐる懇談会を三回にわけて行ない、日本山岳会の歴史、諸外国山岳会の状況などを、山崎安治図書委員長、佐藤テル海外委員長にお願いし、まとめの意味で五月に佐々会長にお話いただきました。

「会員懇談会(会員来室日)」は各委員会にもち回り主催してもらい、総務は裏方になって準備にあたるものであり「毎月十五日」とあらかじめ日を決めたことは、支部会員が東京出張などの折に、

ぜひルームに立寄ってもらいたい。ここから支部会員とのコミュニケーションを育ててゆこうとの意図もあるのです。この案内は、ここ二年くらいの間に入会された、東京を中心とした会員―主に昭和生まれ―二〇〇名くらいに郵送しますが、残念ながら出席者は10名に満たぬ場合もあります。日頃山岳会ルームを訪ねる機会もない、また新しい会員で、なかなか山岳会になじめないと云う会員のための「懇談会」なのです。今後はもっと積極的に参加されて、良い意味で山岳会



西からのエベレスト、Eはユーゴ隊ルート/Die Alpen '80, 3.Q

な方の少ないのは、時の流れなのだろう。(岡沢祐吉)

(岡沢祐吉)

を利用して下さい。このようななかから支部会員との交流も出来、今まではバラバラで行なっていた登山も、各支部間で連絡をとり合って共同で立案し実行することによって、鯛岳や穂高岳での合同の登山が、やがては海外登山へとエスカレートしてゆくことを目論んでいいます。

以上のようなことから、全国三六〇〇名会員のパイプ役となるのが総務財務委員会の仕事と云えます。この「懇談会」は、新しい会員や支部会員のためだけにあつてはなりません。山岳会全会員の

お願
い
'83年度グリーディングカード用写真の再公募
貴男(女)の写真が世界各国に旅をします。お手元の写真を是非お送り下さい。
締切日
九月十三日
日本の山岳風景でモノクロ(手札大まで)
送り先 海外委の総務へ
海外委員会

ための催しでもあります。会員皆様の希望やご意見を、ぜひ「毎月十五日の会員来室日」にお聞かせ下さい。

新生委員会として誕生して一年その一年間のまとめとして、去る六月十九、二十日両日、長野県諏訪湖畔において、初の全国支部の実務者による「支部間懇談会」を開催しました。「古き良き時代」の日本山岳会の伝統を継承しつつ、「行動力ある、実力の組織」の山岳会をつくりあげるために。

(総務委員長・坂本正智)



図書紹介

シシヤパンマ

一九八一年・春

— 日本女子 —

登山隊の記録 —

シシヤパンマの報告会に出席しその帰りにもう報告書を手渡されて、その早技には驚かされた。何故そんなに報告書の作成を急いだかという、今後中国の登山を志す方々への手引書にしたいためだそう。そう自負されるだけあって、中国登山協会の規約も収録されており、各係の報告の中にも、随所に、女性らしく細々と中国の登山事情が記されている。

中でも北村節子さんの涉外係としての報告及びチベット事情の項には、中国特にチベットにおける登山に必要な事柄が、こと細かに紹介されている。また記録係の三

原洋子さんの日記風の文の中にも、参考になることが多い。登山のタクティクス、高所順応に関しては、シシヤパンマの場合キャラバンが無く、標高三六〇〇ギのラサに飛行機で入り、旬日も経ずして、車で五一〇〇のBC入りをするということに加えて、山の地形自体がまた高所順応を難しくさせるという悪条件が重っており、それを如何に克服するかに苦慮されたようだが、結果として、医療報告には、高血圧を示し、狭心症様発作を起こした症例、眼底出血で帰国後も後遺症に悩む症例が報告されており、低酸素暴露の厳しさを物語っている。

この報告書の圧巻とも言えるべき田部井隊長の登頂記には、心電図に異常を認め、肺機能も正常以下で、レ線所見で肺気腫が認められるという身体なのに、自らの意志で無酸素登頂を遂げられたと記されている。田部井隊長の心肺の所見は、登山には一向に支障が無いと言われ、今回は高所順応抜群で登頂者になられたが、高所協力員の献身的なサポートがあったに

ろ、常人のなせる技ではないとは思いました。登頂時の苦痛は私だけで沢山、とても他の隊員には経験させられないと記しておられるように、苦闘の連続であったよう。全身意志の固りのような田部井隊長には脱帽する。

また、大方の登山隊がスポンサー探しや資金集めに苦労するが、エベレストの登頂者として輝しい業績を持つ田部井さんですら、今ではもう他人の援助で山に登る時代ではないと言われる。一千万もの借財を残して出発されたくらいだから、諸事切り詰めた財政であったと思うが、その節約の仕方、一例を示せば、酸素を直接フランスのメーカーから買い、しかも中国登山協会に送らせるとい手段をとり、半値近い出費ですませておいで。こうしたアイデアも学ばべき事例の一つだと思ふ。

最後に、囲みの記事など、思わず吹き出してしまふような愉快なエピソードも盛りこまれ、全体を通じ纏りもよく、読後感も爽やかな報告書だと感じた。

一九八一年九月、一九四頁、女子登攀クラブ発行、二〇〇〇円 (黒石 恒)

山岳講演集

自然・登山・探検

西堀栄三郎ほか

本書は、日本山岳会岐阜支部が

あつてこそ初めて成るからである。本部に属している私達からすると、会報や、こうした刊行物等と各支部の活躍を知ることには実に嬉しい。山に魅せられた者が、それぞれの地方で、それぞれの伝統を守り育て、新たな発展をめざして活動していることを知り、会の厚みや広がりを感じたい。

設立十周年といえは、支部としては若い。その岐阜支部が美濃や飛騨という、この上もないホームグラウンドと、今西さんを始めとする人脈や地元愛好者の人材に恵まれ、先輩支部に勝るとも劣らない活動の証を、こうした形で世に贈ってくれたことを慶び、他支部への刺激ともしたい。

なお、支部会員以外の読者としては、折角の岐阜支部の刊行物であれば、奥美濃や飛騨の、山や人や山村等に関する講演が、ひとつくらいは、あつても良かったのではないかと思われた。

一九八一年十二月、日本山岳会岐阜支部出版委員会刊、B6判二二四頁、送料共一五〇〇円 (滝川 清)

神話と伝説の旅

川喜田二郎著
加藤 千代著

本書は、一言にしていえば、ネパール中部のやや西寄りに位置し

ているカリガンダキ河の本谷と、それに流れ入る支流が形成する横谷で、そこに住む人々の口から直接に採集された伝承をつたえ、適度に解説をほどこす書物である。

いかに海外旅行が日常化して、ヒマラヤに行く日本人の数が増しているとはいっても、個々の旅行者にとってはまぎれもない事件なのであって、そのために旅行記はどうしても自己中心的な紀行文もしくは登山記録の形をとることになる。その種のものとは逆に、自己をおさえて客観的な記述をめざし、それによって研究資料としての価値を主張しようとするところから本書が生まれた。日本ネパール協会の編集による「ネパール書」がそうした意図から企画されたものであって、その第一巻である本書はこの意図を身をもって示す役割りを果たしている。

地元の語り手たちとの関係づくり、録音機材の運搬、語られた物語の文字化、内容の分析など、それぞれが情熱なしにはなされえないが、未登峰の征服などのようにジャーナリズムの脚光を一時的に浴びる性質のものではない。しかし持続された情熱に支えられた地道な努力の産物である点にこそ、本書の自己主張がある。

十九世紀の前半にドイツのグリム兄弟によって範を示された民話採集がヨーロッパから日本に及んだとき、明治時代の前半に文部省

が全国各地に収集を指示した際、岡山県からは桃太郎の話しかないという報告があったという。あれから一世紀ほど経過して、今や民話採集の努力はヒマラヤにまで及ぶ。それも日本人が同じアジア人であることをネパール人たちに認識させ、心と口をひらかせるのでなければ成り立たない仕事である。このように日本人による民話収集の歴史の里程標といった観点からも、本書の価値はいっそう増すといえるのである。

川喜田二郎氏の「伝承の背景を考へる」と題された長い序文が、民話採集の舞台となった西ネパールの文化の位相を考察する。つづいて同じ川喜田氏の「マガル族の物語」が第一部として、アジア民俗研究者の加藤千代さんの「伝説の旅——タッコラ地方をゆく」が第二部として本書の基幹部分をわけあっている。

脚色をほどききれない伝承の常で、地名の起源を説明する伝説のたぐいから、起承転結をもつ物語に至るまで、さまざまなタイプの話が収録されている。天に昇れない死者の霊や魔女の話など。私の知るヨーロッパ・アルプスの伝承と驚くほど似ていることを知るのも興味深い。その反面でまったく独自の習俗や想像が紹介されていて大いに知的刺激をあたえてくれる。シーカ村のルイ・ブジャと呼ばれる、娘たちだけの祭(本書

八一頁以下)をはじめ多くの報告が私にはまったく新しいことがらであった。加藤さんがネパール女性たちと文字通り起居をともにして、同性ならではの感情移入によって語り手である女性の心理まで探ろうとするのも特筆にたいする。とくに、夫と死別した女性を社会から排除しようとするヒンドゥー社会で二十年以上も生きつづけてきた老女についての記述(一六九頁以下)が読後の印象に強い余韻を残してくれる。

アルプスの関連で私の注意をひきつけたものの一つがカリガンダキの河岸から出土するアンモナイト貝の化石とそれへの信仰についての記述である(二〇五頁以下)。十八世紀はじめアルプスの自然科学者たちは山地で発見された貝の化石をノアの洪水水を実証するものとして聖書とむすびつけて解釈しようとした。宗教と対決して迷信のヴェールをはぎとるところに西洋の科学の宿命的な役割りがあったが、宗教を科学によって証明しようとする努力もあったのである。その点でネパールの貝の化石にまつる伝承は、まだ科学的発想による合理化の洗練を受けていないがゆえの純朴さをたもっている。これはたんなる一例にすぎないが、本書の提供する貴重な報告はネパールの局地的研究の枠をこえて、将来の比較文化学もしくは比較民俗学のレベルでの国際的な

グルカ兵と

英国人登山家の歓迎会

六月十二日(土)にルームで行なわれたこの歓迎会は、ジャーナリズムで騒がれたためもあって、大変な賑やかさであった。何人かの美人コンパニオンまで混じり、歌って、踊って、飲んで、食べて……。



グルカ兵とイギリス人登山家の歓迎会で、1982, 6.12. ルームにて

ディスカッションの可能性をひいてみせてくれる。
B6版、二四六頁、古今書院、二〇〇円 (宮下啓三)

スイスの山々

—SAC山案内人—

の体験談—

オレル・フェスリ社編

岡沢祐吉訳

自宅の近くの新刊書屋さんを偶々覗いたら、「スイスの山々」という標題の本が眼に入った。新聞でも、雑誌でも広告に気が付かなかったので、手に取ってみると、会報「山」編集担当の岡沢氏の手

になるもの。驚いて早速購入して読んでみたところ、正に巻を捲う能わずで、夢中で読了してしまった。こんなことは最近余りないことであった。

岡沢氏は、会報「山」の四〇二号から四〇九号に八回にわたって「ブラヴァンド氏の山案内人手帳」と題して、写真入りで克明にスイス山案内人の一人であるブラヴァンド氏について、また横さんを始めとする、ブラヴァンド氏と山行を共にした日本人登山者について書いている。

その岡沢氏がミュレンからシルトホルン行のケーブルカーに乗り

うとして、歩いて行く途中、裏街の本屋で偶然この本に出会ったという次第である。原書は一九三六年初版以来版を重ね、一九六九年には第七版を数えているというから、現地では相当に読まれているロングセラーの一つといえる。こうした本が今までわが国に紹介されていなかったことが不思議といえは不思議だ。

本書の内容はスイス各地出身の山案内人三十人が、それぞれの山行での経験、恐しかったこと、苦しかったこと、楽しかったこと、成功、不成功をあらゆる面から、山案内人として、或いは同伴者の立場から述べている。

現代の登山はガイドレスから始めて、パリエイションルートとか単独登山とか、冬期登山とか、登山の方法、形式は昔とは異なっていることは事実である。また単にスイス・アルプスにとどまらず、その地域もグローバルなものになって来ているが、登山の原点は昔も今も変わっていないのではないかとと思う。その一つに登山行為にはいつも大なり小なり生命の危険が含まれているということがあ

る。日本の山とは高度、地形、気候その他あらゆる点で異なるスイスの山々での出来事ではあるが、その語られていることは実にわれわれの身近なことなのである。スイスの山々で起きたこと（一件は南米アンデス）を飾らず、正直に時にはユーモアをまじえて語っているのである。このことは、登山の形式や方法は異なるが、山を愛し登山を好む人々にとっては、実に参考となり、教訓となり、また考えさせられることが多々あるのである。

本書は岡沢氏が、前述のようにブラヴァンド氏を始めとする、スイスの山案内人について精通されているだけに、訳者としては、うってつけの人というべきで、その訳文は流麗にして、読み易い。

私は、大学、高校の登山指導者が、学生、生徒を指導するのによいテキストになるのではないかとと思う。これは単なる登山技術の書ではなく、登山の心の書であると思うからである。

なお、偶然かどうか知らないが、巻頭と巻末を飾っているのが、サムエル・ブラヴァンド氏とエミール・シュトイリ氏であり、二人とも日本人登山家との山行の様子を書いている。

ベースボール・マガジン社刊、定価一、九〇〇円、A5版、一八一頁

(斎藤健治)

私は昨年七十になり、老人むきのレクリエーションを、と考えて坂東の札所めぐりを思い立った。浅草寺の清水谷さんから観音巡礼の本をいただいたことやそんな古い寺なら建築など美しいものもあると言うのである。だからプロの巡礼隊のようにご詠歌をうたったり、納経とかご印をおしてもらおうと言うこともしないのである。

そのビルゲルに去る十一月十四日、福島などの県境にある八溝山に行った。登ったと言いたいがこの山は頂上まで車で楽に行けるの

秩父宮 雍仁親王殿下 写真集

写真集



Finsteraarhorn (4273 m) 頂上の殿下 (右端)
1926, AUG. 19. (ハッ切)

Great Gable 峰 (899 m) [英国 Westmorland Cumbrian 山脈] のニードル登攀。ピーク上、右に帽子の出ているのが殿下。

1926, AUG. 4. (四ッ切)
「令嬢達の手前、あまり閉口した様子も見せられないと思ひ、懸命動かないくらし疲労し、二日目の夕食のときなどナイフとフォークがうまく使えない程でした」(「想い出の記」より)

註

前回の二葉と今回の四葉の都合六葉の写真は、昭和五十七年度総会々場で会員に披露され、その後フィルム委員会が保存している。(中村純二)

お知らせ

第二回キノコ観察山行

期日 九月四日(土)・五日(日)

場所 富士山麓・宿泊 奥庭荘

講師 上野英世・参加者 三十名以内・詳細は集

会委員会まで。



山頂の標石

小野 幸

深い霧のただよう山頂をさまよっている時、三角点の標石を見つけたと、ほっとした感じになる。

今年もまた上高地山研で逢いましょう！

である。めざすお寺はその山腹にあるが、まず頂上に車をすてた。数歩で八溝神社、その屋根にはクラストした残雪がこびりついていた。その社を左にまわるとすぐ頂上、そのちいさな頂上には三角点があった。その標石は三分の一ほど土にうまっていたが、無傷の美しいものであった。

こんな場所、登山者よりもマイカーやその家族たちのおとづれの方がずっと多くなったであろうこの山頂の標石が、こんなに美しく保たれていたのか、と言うよろこびとおどろきがわいてきたのだ。もし石の付近で大きな火でもしていたら石は欠けてしまっていただろう。地方自治体などでは文化財のまわりにたき火禁止区域の

条例をつくっている。登山をする者はこの頂上などにある三角点、その他の標石を保護する義務はないだろうが、それを破壊する権利もないと思う。でもいつまでも健全なすがたで山頂にわだかまっていたほしいと思うのは、ひとり国土地理院のお役人ばかりではないであろう。

第三回

小田急沿線会員の

親睦山行

この集会は昨年十一月に開催されたが、今回はまた丹沢通の古谷聖司会員のお世話で、六月十二日(土)西丹沢の中川沿いにある奥丹沢山荘を借り切って、一タ懇親会の宴を張った。大森ドクター自

作の映画エベレスト他を觀賞し、初対面の会員もお互いに旧知のような暖かな交流を行なった。翌日は写生をするF画伯を残して車に分乗し、東沢林道の最奥まで登る。ここからTさん、Kさん達は若い人々と東沢を進行、Oさん組は古谷さんの案内で、ツツジ新道を辿り、ともに桧洞丸の頂上に登る。天気もこの季節としてはまあまあ上等で、ツツジの花は終わったが、この辺りの丹沢特有の山毛櫨の原生林が殊のほか美事であった。帰りは、朝出た奥丹沢山荘で全員が落ち合い、午後三時無事に解散となった。参加会員の車に分乗させて貰ってそれぞれの最寄りの場所へと別れた。

古谷会員の肝入りで、神奈川県



Grindelwald の氷河にて 右より3人目殿下
1926, MAR. 14.~28. (六ッ切)

「ぞろぞろ人のついて来ないミューレンでの解放されたスキーや氷河歩きは、一生での最上の楽しみの一つだった」(「想い出の記」より)



Haymarkat 頂上 [mürren 付近] の Sir Arnold Lunn (左)

このスキーツアーには殿下も同行された。

1926, MAR. 14.~28. (四ッ切)

「アーノルド・ラン氏経営のホテルで泊り、背後の山に出かけた。スリルを伴う愉快なツアーだった」(「想い出の記」より)

片山岳会の若い岳人の応援も得て、楽しい食事、楽しい山行になったことを感謝する。

参加者 折井健一、近藤信行、緑夫人、大森薫雄、網蔵志朗、鳥居亮、藤江幾太郎、土田平三、関喜義、鈴木正俊、三栖寿生、狩野芳郎、滝沢芳常、古谷聖司、石川治郎、小林碧、田中千穂子、北島憲之、石井貞雄、加藤徹也、渡辺玉枝、山本正基、二十二名。

白馬大雪溪より唐松岳へ

小林 碧郎

雪溪の黄昏れながし鳴く目細
雪溪の風に解解く高嶺草
標を脱ぐ雲表の夕焼けなり
雷鳥の雛一羽なるかなしさよ
岩枯梗霧しづくして日を迎ふ
雷鳥の雛よ霧にわれも濡れ
こまきさや雲に落ちあふ縦走路
駒草の散ることもなく実をいそぐ
岩後には声よみがえる雷のあと
わが影を逸れて沈みぬ山椒魚

雨飾山 山菜山行

集会委員会

六月十一日(高曇)午後十時四十分、バスとマイクロバスに分乗して小谷温泉へ向かう。

六月十二日(晴)白馬山麓で快

フィルム映写会

のおしらせ

昭和初期に別宮貞俊元会長が撮影された黒部、剱沢大滝等16フィルム映写会を行います。岩永信雄氏他の徒弟ぶりも見られますのでふるってご参加下さい。

日時 昭和57年10月9日(土)午後2時~4時

場所 日本山岳会ルーム

題名 「黒部の秋」(昭和四年)「真川より黒部川」(昭和六年)「剱沢入り」(昭和八年)「スキーツアー」(昭和四年)「以上いずれも今回、別宮家より寄贈頂いたものです。」(フィルム委員会)

(石川治郎)

なお、第三回の親睦山行は、十一月二十七日(土)~二十八日(日)に丹沢水無川のロッジ・峠(後藤恭夫会員経営)で開催を予定しています。小田急沿線の会員のみならず、知友の方を誘って参加して下さい。

(折井)

師を中心に三つのグループに分かれて雨飾山へ向かう。
雨飾山は針葉樹林を欠いているが、潤葉樹林は仲々幽邃でお目あての山菜も多く、そこそこ咲く山の花は誠に多彩である。
植物のことを書くなど柄ではないが、山の花をのぞいては雨飾山は語れないような気がする。次々に咲く山の花を追ってコースの概要を書いて見ることにする。
温泉宿の裏手からウスベニウツギの咲いた急坂を登って鎌池の畔へ出ると、残雪を刻んだ金山と天

お知らせ

ビールパーティ

恒例のビールパーティは左記の通りに行なわれます。

日時 九月三日(金) 十八時三十分より

場所 JACルーム

会費 千五百円

(婦人懇談会)

お知らせ

図書交換会に 図書をご出品下さい

本年度の図書交換会は、十月二十三日(土) 午後二時からルームで行ないます。

図書委員会では、現在その出品図書を求めています。山岳に関する和書、洋書、雑誌なら点数の多少を問いません。
ご出品いただける方は、図書委員会まで電話かハガキでこ一報下さい。

(図書委員会)

お知らせ

JAC自然保護全国集会 第二十五回 もみじ会

(静岡支部三十周年記念)

来る十一月十三日(土) 午後二時より四時半まで、自然保護委員会による全国集会を「井川少年自然の家」で開きます。

今回は静岡支部のお世話によりもみじ会と併催の形で行ない終了後もみじ会に合流の予定です。佐々会長も出席されフィールドマナー等を検討する計画です。各支部の自然保護委員は勿論、自然保護に関心をお持ちの会員の方々は是非ご参加下さい。

もみじ会はご存知の通りJAC会員の懇親を目的とした会で本年はちょうど二十五回目です。同時に静岡支部創立三十周年にも当たりますので、これらを記念の行事にしたいと思っています。一日目の午後は自然保護委員会による全国集会も開きますから、関心のある方は是非ご参加下さい。

狗原山が静かに影を落している。ユキツバキとスミレサイシンの咲いた、池の左側を登って林道へ出ると、目指す雨飾山が初めて見えてくる。

広い林道を暫らく辿って大海川の右岸へ下ると、小さな湿原にミズバショウとリュウキンカ、山裾にシラネアオイとイカリソウが優美な花を咲かせている。

ウドやヨブスマソウを採取して暫らく山裾をからみ、大きな川柳の生えた川原から急な登りにかかる。ブナのは次第に大きくなり、タムシバ、ガマズミ、ナナカマド、アカヤシオなど木の花が点々と咲き、樹下にはイワカガミ、ミヤマカタバミがひっそりと咲いている。

急な雪溪のツメにフトンビシの岩壁を仰ぐ気持よいテラスに出たのが十一時半、腹も大分すいたので早めの昼飯を食べる。

急な雪溪をトラバースして大きな登りにかかる。カタクリ、サンカヨウ、ツバメオモト、それにシラネアオイが相変らず咲き続けている。

小さなスケや岩石の露出したヤセ尾根を登って笹の台地へ出ると、ハクサンイチゲやハクサンチドリ、咲いたゆるやかな尾根づたいになり、最後にナンキンコザクラの咲いた急坂を登って雨飾山の頂上へ出る。午後一時半、東よりの最高点に二等三角点、

少し離れた西峰に五基の石像の安置された頂上からは、文字通り三六〇度の眺望が開けている。

東に近く残雪をちりばめた金山、天狗原山の平頂の左には焼山と火打山、右は黒姫山、乙斐山、一段高い高妻山、ギサギサに裂けた戸隠、西岳へと続いている。

うすく煙った西の空には、真正面に朝日岳と長柄山、左に赤男山、雪倉岳など、爺ヶ岳までの山々が残雪豊かな峰頭を連ね、右は犬ヶ岳、白鳥山へと急に高度を落している。

急激に落ち込んだ北側には、海谷山群が鋭い岩峰を屹立させているが、日本海は淡いもやの中にかくれている。

山菜の勉強と採取に精出して頂上を踏めなかった人もかなりいたが、全員午後五時過ぎに宿へ帰る。

午後六時から一時間ばかり、白馬村教育長長沢武講師のスライドと実物による山菜の勉強会があり、引続き懇親会に移る。

盛り沢山の山菜料理を肴に飲みかつ、楽しい飲談に時の経つのも忘れる程であった。

六月十三日(曇) ゆっくり温泉に滞在して山菜採りや散策を楽しむ組、大渚山への半日山行を試みる組に分かれて行動し、午後一十分小谷温泉を後にする。

時々小雨のぱらつく中央道を引き返して新宿へ着いたのが午後八

時頃。帰京と同時に梅雨入り発表とは、何と強運な精進のよい人達であろう。

終りに大変お世話になった現地白馬村の方々、信濃、越後支部の会員、集会委員の諸兄姉に厚く礼を述べて報告と致します。

参加者 長沢(講師)、丸山、菅野、久保、高沢、入沢、山崎(道)、上野、小原、中垣、斉藤、山田、長嶋、石間、平柳、吉田、井村、大野夫妻、清水、宮城、柴田、須田、広羽、山崎(静)、菅見、荒野、岩堀、高田、松沢、松原、大原、土井、岩井、柏原、日置、小松原、信濃支部 岩佐、村田、角田、金井、青木、綿引、前田、越後支部 早川、山崎(幸)、石田。

集会委員 村木、菅原、前田、秋元、若林、竹内、小野寺、中沢。以上五十五名。

(石間信夫)

懇親探鳥会

自然保護委員会

晴天にめぐまれた四月二十四、五日、島田異委員の喜寿祝と織内信彦委員の古稀祝を兼ねて八ヶ岳山麓で懇親探鳥会を行なった。二十四日午後四時、山梨支部山村氏の出迎えをうけて小淵沢駅に集合用意のマイクロスパスで国鉄八ヶ岳山荘に行く。立派な建物で木組みなどに感心していたところ、山村氏から「これは国鉄の全職員がリ

い。
期日 昭和五十七年十一月十三日(土)・十四日(日)
場所 井川少年自然の家
集合 十一月十三日(土) 十一時
時

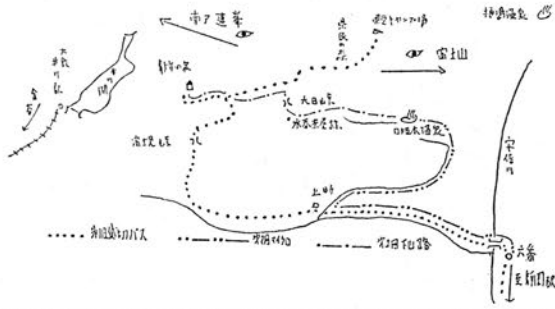
静岡駅新幹線改札口

行動予定 十三日(土) 十一時に静岡駅より貸切バス(車内で各自持参の弁当をとる)で井川少年の家入口、十三時十分

(A)自然保護集会参加者は徒歩約二十分、少年の家会議場へ(会議、十四時~十六時三十分)

(B)集会に参加しない会員はバスで県民の森へ。ここで南アの山々を眺め、再びバスで少年の家に着、十六時三十分。十七時五十分まで部屋割、入湯。懇親会は十八時~二十時、十四日(日)朝食八時(記念品、弁当を受取、八時四十分玄関前に集合、記念撮影。九時出発。徒歩四十分で大日本温泉(入湯、昼食)。ここからマイクロスパスで六番。六番より定期バス(四九〇円)で静岡駅、解散。

地図 五万分之一、井川、南部参加費 九千円(子供八千円)内訳 静岡駅より懇親会場までのバス代、宿泊代(一泊三



食で懇親会費を含む)、記念品代、通信雑費、入湯税、帰路六番までのマイクロスパス代。
申込方法 氏名、会員番号、性別、年令、住所、電話番号、自然保護集会参加の可否を記入の上、郵便口座(有度局)名古屋4233610日本山岳会静岡支部へ送金のこと。送金をもって正式申込とし、スケジュール明細表を送ります。

申込期限 十月二十日

(自然保護委員会 静岡支部)

クリエーション費を三年間積立て作ったもので、工費は三億円かかった」と説明をうけて、あらためて国鉄の皆様に脱帽した次第である。夜は明朝の探鳥にそなえて、松沢、渡辺両委員持参の鳥の声をテープを聞いたり、島田、織内両委員の昔がたりを耳をかたむけた。翌朝は殆ど全員四時半に起床山村氏の案内および松沢委員の指導で探鳥に出かけた。アカハラ、シジュウカラ、ヨタカ、アカゲラ、コゲラなど、十数種の声を聞いた。姿を眺めることができた。とくにイカルの「月日星」の音が印象的であった。朝食後は美しい森の散策をたのしみ、正午すぎ解散した。

参加者 島田 巽、織内信彦、渡辺正臣、國見利夫、武田満子、池田 剛、松本恒広、近藤 緑、中保、松沢節夫、千葉重夫、関塚真亨、木名瀬亘、大木淑子、山村正光、沢井政信、以上十六名

札幌に元会長

三田幸夫氏を迎えて

北海道支部

六月二十日(日)北大スキー部七十周年記念式等に出席のため来道された、元日本山岳会々長三田幸夫氏を札幌雪印パーラーに迎えて歓談の会を開いた。相川先輩の音頭で乾杯の後、三田氏から大正時代、近代登山の夜明けを告げる

積雪期の登山、スキー合宿五色温泉、立山、鍋での焚火の話、トナカイの寝袋、麻縄(船で使う)のザイル、板倉勝宣さんのこと、北大植物園に館脇先生と合宿しヒデ(故伊藤秀五郎氏)に酒を買いに使い走りさせた話等、エピソードを交えた楽しいお話は出席者一同を魅了した。しめ練りは娘婿にあたる芳賀孝郎氏の乾杯、そして散会した。

出席者・順不同 三田幸夫、渡部盛夫、浅利欣吉、新妻徹、亀井秀子、平野 明、芳賀孝郎、相川修、柳田凉子、石井忠雅、小野肇、川越昭夫、野田四郎、今井三男、及川敬一

会務報告

6月理事会

6月14日午後6時30分

本会・ルーム

出席者 佐々会長、渡辺副会長、神崎、田村、西村、中村、河村、高本、菅沢、高橋、岡沢、鈴木、松家各理事、小倉、太田監事、佐藤、大塚各評議員

(委任) 田口副会長、伊丹、川上、小倉、赤松、大倉、水野各理事、松丸、村木、小原各評議員

報告事項

▽会務報告(総務)、年次晩餐会の準備報告、支部懇談会の計画報告、新入会員対象のアンケート結果報告、委員会々議七月上旬開催

の件等
▽各委員会報告(月例資料配布)うち主眼点、(1)フィルム委員会では年二回の映写会を計画、(2)学生部のボゴダ遠征計画決定、(3)婦人懇談会では支部の婦人会員との交流を計画等
●審議事項 なし
ルーム日誌 (57年6月)

1日(火)	婦人懇談会
3日(木)	自然保護委講演会
7日(月)	日ネ協会
3日(火)	フィルム委員会
9日(水)	自然保護委員会
10日(木)	山研委員会、炉辺会
12日(土)	海外委グルカ兵とイギリス登山家歓迎会
15日(火)	図書委、婦人懇談会
16日(水)	三水会
17日(木)	学生部集会
22日(火)	山菜山行写真交換会
23日(水)	婦人懇談会
24日(木)	指導委員会
25日(金)	学生部集会、婦人懇談会
26日(土)	科学委員会
25日(金)	学生部委員会
26日(土)	今月の来室者47名
25日(金)	支部変更
4038	山崎英雄(北海道へ)
6824	丹治計二(宮城へ)
3531	終身会員に 垣内康時

山岳洋書購入のお知らせ

図書委員会

図書委員会では今回山岳関係の洋書 137 冊を購入した。フレシフィールドのラウンド・カンチ、デシオの K₂ のイタリア語版 ウインバーのアルプス登攀記初版、カニンガムのバイオニヤ・オブ・ジ・アルプスの限定版サイン入り、ストウデルのユーバー・アイス・ウント・シュネーなどきわめて珍らしい、現在では入手しがたいものが多数あり、目下委員会で整理中である。

Howard Bury: Mount Everest the Reconnaissance, 1921
 Bruce, General: The Assault of Mt Everest, 1922
 Norton: The Fight for Everest, 1924
 Younghusband: The Epic of Mt Everest, 1926
 Huston: First over Everest, 1933
 Rutledge: Everest 1933
 Younghusband: Everest the Challenge 1936
 Rutledge: The Unfinished Adventure, 1937
 Somervell: After Everest, 1936
 " " 1947
 Tilman: Mount Everest 1938 (1948)
 Roberts: I'll Climb Mt Everest alone, Mauris Wilson, 1957
 Denman: Alone to Everest, 1954
 Shipton: The Mt Everest Reconnaissance Expedition, 1951
 スイス隊公式報告: Everest, 1952
 Lambert: Forerunners Everest, 1953
 Hunt: The Ascent of Everest, 1953
 Noyce: South Col, 1953
 Hunt: The Ascent of Everest (for younger) 1954
 Hunt: Our Everest adventure, 1954
 The Picture of Everest, 1953
 Hillary: High Adventure, 1955
 Shipton: Everest, 1955
 Murray: The Story of Everest, 1953
 Eggler: The Everest Lhotse Adventure, 1957
 Singh: Lure of Everest, 1961
 Ullman: American on Everest, 1965
 Hornbine: Everest the West Ridge, 1965
 Bonington: Everest South West Face, 1973
 Conway: Climbing in the Himalaya, 1894
 Waddell: Among the Himalayas, 1900
 Collie: Climbing on the Himalaya, 1902
 Freshfield: Round Kangchenjunga, 1903
 Workman: In the Ice World of Himalaya, 1900
 De Filippi: Karakoram and Western Himalaya, 1907
 Mumm: Five Months in the Himalaya, 1909
 Hedin: Trance Himalaya vol. 1~3, 1909
 Bruce: Twenty Years in the Himalaya, 1910
 De Filippi: Himalaya Karakoram and Eastern Turkestan, 1917
 Rundall: The Ibex of SHĀ-ping, 1915
 O. Dyhrenfurth: HIMALAJA (Kurz の地図付) 1930
 Irving: The Romance of Mountaineering, 1935
 Bauer: Kampf um den Himalaja, 1934
 Bechtold: Nanga Parbat Adventure, 1935
 Bauer: Auf Kundfahrt im Himalaja, 1937
 French Himalayan Expedition: Himalayan Assault, 1936
 Shipton: Nanda Devi, 1936
 Shipton: Upon that Mountain, 1943
 Murray: Scottish Himalaya Expedition, 1951
 Herzog: Annapurna, 1951
 Herrligkoffer: Nanga Parbat, 1953
 " Im Banne des Nanga Parbat, 1953

Desio: La Conquista del K₂, 1954
 Houston: K₂ The Savage Mountain, 1955
 Evans: Kangchenjunga the untrodden Peak, 1956
 Franco: Makalu, 1957
 Schmucks: Broad Peak 8047 m, 1958
 Noyce: Climbing the Fish's Tail, 1959
 Eiselin: The Ascent of Dhaulagiri, 1961
 Franco: Bataille pour le Jannu, 1965
 The Himalayan Journal 1964
 " 1967-68
 " 1970
 Smith: The Story of Mont Blanc, 1853
 Forbes: Norway and its Glaciers, visited in 1851, 1853
 Berlepsch: The Alps or Sketches of Life and Nature in the Mtn., 1861
 George: The Overland and its Glaciers, 1866
 Whymper: Scrambles amongst the Alps in the Years 1860-69, 1871
 Whymper: The Ascent of the Matterhorn, 1880
 Cunningham, Abney: The Pioneers of the Alps, 1887
 Gilbert & Churchill: The Dolomite Mountain, 1864
 Coolidge: Swiss Travels and Swiss Guide-book, 1889
 Whymper: How to Use the Aneroid Barometer, 1891
 Swiss Picture, 1850s
 Stüder: Über Eis und Schnee, 1896
 Dent: Above the Snow Line, 1885
 Mathews: The Annals of Mont Blanc, 1898
 Rey: Peaks & Precipices Scrambles in the Dolomite, 1900
 Forbes: Travels through the Alps, 1900
 Conway: The Alps from End to End, 1900
 Moore: The Alps in 1864, 1902
 Harrison: My Alpine Jubilee, 1908
 Coolidge: The Alps in Nature and History, 1908
 Conway: The Alps, 1910
 Coolidge: Alpine Study, 1912
 Conway: The Alps, 1904
 Young: Mountain Craft, 1920
 " " 1920
 de Beer: Early Travellers in the Alps, 1930
 Alpine Club Member: Peaks, Passes and Glaciers, 1932
 Klucker: Adventure of an Alpine Guide, 1932
 Neruda: The Climbs Norman Neruda, 1910
 Noyce: The Alps, 1961
 Mason: Abode of Snow, 1955
 Alpine Centenary, The Alpine Journal vol. LXII, 1965
 Freshfield & Sella: The Exploration of the Caucasus vol. I~II, 1896
 Mummery: My Climbs in the Alps and Caucasus, 1895
 " " 1946
 Tyndall: The Forms of Water, 1889
 Dent: Mountaineering, 1892
 Burlingham: How to become an Alpinist, 1900
 Abraham: Mountain Adventure at Home and Abroad, 1910
 Larden: Recollections of an Old Mountaineer, 1910
 Conway: Mountain Memories, 1920
 Freshfield: Below the Snow Line, 1923
 Jeffers: The Call of the Mountain, 1923
 Finch: The Making of a Mountaineer, 1924
 Longstaff: This my Voyage, 1950
 Collomb: A Dictionary of Mountaineering, 1957
 Ruskin: Modern Painter vol. 4, Everymans Library
 Livingston: Missionary Travels in South Africa, 1857
 Stanley: Darkest Africa vol. 1-2, 1890 (以下次号)

「お知らせ」

遭難救助

訓練と

岩登りの

講習会

十月九日、

十一日に、

指導委員会

と青年懇談

会が共催で

行ないます

詳しくは青

懇担当の高

橋か、総務

の坂本まで

比良地形探索山行の申込

方法一部追加について

前号会報でお知らせした十月十六日、十七日に行なわれる当該山行申込みには、保険契約の関係で、年令も記入して下さいようお願いいたします。(科学研究委員会)

昭和五十七年八月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五—四

サンビュウハイッ四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 佐々保雄

編集代表 岡沢祐吉

電話東京(03)四四三三

振替口座東京三—四八二九番

印刷所 東京都港区赤坂一丁目三番六号 株式会社 技報堂